

## 「自粛」という枠に縛られ 遠慮しながら過ごす日常から抜け出したい

去年も、今年もまたコロナ禍で過ごす変則的な夏が来る。感染防止のため夏祭りの大部分が中止、もしくは無観客の開催になり、伝統行事の継承が危惧されている。

親族の帰郷や観光で訪れる交流人口の減少は、経済損失よりも元気の源を失うような事態になっていく。過疎社会に暮らしている、寂しさには慣れているのに、「夏だけは元気に」と活力に満ちた季節の到来を待つのだ。

先日、東京に嫁いだ娘と暮らす義母にあたる方から、嬉しい手紙をいただいた。「テレビで五能線のコマージュラルを見て、懐かしく思い出しました」と。五歳になった孫を連れ秋田に来て、共に過ごしたあの夏

の思い出は忘れられない。

秋田空港で出迎えると、羽後町田代の「かやぶき山荘・格山」に行つて古民家暮らしを体験してもらった。翌々日は、秋田

駅から五能線リゾート列車で五所川原駅まで乗車してもらい、私は車で追いかけて駅で合流した。鯉ヶ沢の温泉旅館に泊り「うに井」を堪能したが、翌日は、十二湖の青池とフナ林を散策してから、海辺の磯で孫と貝拾いをして遊んだ。そして帰り道

に、三種町のレストラン「ハーベリー」でデイナー、という日程であった。孫や親戚になった人たちに、秋田の自然や文化に関心を持って欲しいと、撮影現場での体験を基に、気に入った場所へ案内して

いる。祭り、行事や秋田らしいと思える所へ連れていくのは、将来にわたつて自分との繋がりを意識してもらいたい、と望みを託すからだ。

手紙の締めくくりに、「今のように、何も出来ない時が来るとは思いませんでしたが、後でこんな時があったなと思ひ浮かべると、普通の生活はありがたいと感じます」としたためてあった。

コロナ禍で暮らしている今、この文面は深く胸に染みてくる。「自粛」という枠に縛られ、遠慮しながら過ごす日常からは、出来るだけ早く抜け出したいのだ。いつもの活力に満ちて元気に暮らす夏を、取り戻したい。